

開業医ネットワーク化

町ぐるみ 在宅医療

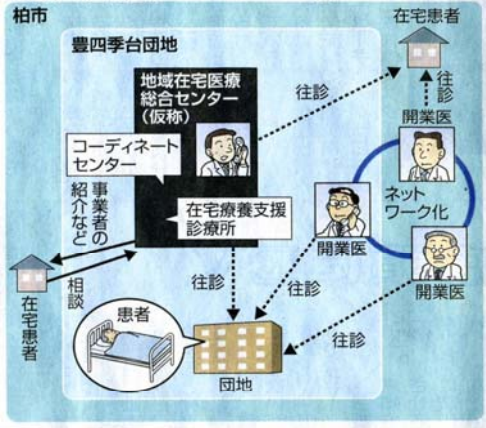
「最期まで自宅で暮らせる町」を実現しようと、東京大学は、千葉県柏市などと共同で、在宅医療システム構築のためのモデル事業を来年度から同市で始める。開業医向けの研修プログラムの開発や、医師同士の連携体制づくり、在宅療養を希望する人に医師や訪問看護事業者を紹介する窓口の設置などが柱。都市部の高齢化に伴い、在宅医療ニーズが急速に高まるのに備え、各地で応用できるモデルを4年以内につくり、全国での普及を目指す。

都市部高齢化に対応

東大・柏市モデル作り

東大が千葉大と開発中の研修プログラムは、介護保険など関連制度や、訪問看護・介護職員らとの連携について学ぶのが特徴。在宅医療を実際に行っている開業医の訪問診療に同行し、機器の取り扱いや患者の状態の見極め方なども実習する。研修は月4回、4か月間を想定している。

●柏市の在宅医療モデルのイメージ図



都市部の高齢化 地方で顕著だった高齢化が、今後は大都市部で急速に進む。国立社会保障・人口問題研究所の推計では、65歳以上の比率は、東京都で2005年の18・5%が35年には30・7%、大阪府で18・7%が33・3%、福岡県では19・9%が32・6%となる。70歳頃から入院率、死亡率とも上昇するため、医療需要も激増する。